



田園

十月号

聖フランシスコ カトリック田園調布教会

(No.706. 2022.10.1)

カトリック田園調布教会報

☎03(3721)7271

〒145-0071 東京都大田区田園調布3-43-1

絶えず祈る人々は幸いである

協力司祭 アントニオ金東炫神父

私たちは夏の猛暑、COVID19の再流行、自然災害などの手怖い相手との戦いを乗り越えて、心も体も豊かに満たされる収穫の秋を迎えました。

秋といえば、読書の季節、思索の季節と呼ばれていますが、信仰をもって生活する私たちにとって秋は、何より祈りの季節と言えるのではないのでしょうか。

祈りの達人と呼ばれている田園調布教会の守護聖人フランシスコの祝日をはじめ、母マリアと共に祈るロザリオの月、すべての死者を思い起こし共に祈る死者の月、そして来られる主を迎える準備の期間である待降節につながります。このように考えてみたら、秋は一年の終わりを準備する季節でもあります。

祈るという行為は霊的存在だけに許された特権で、生きておられる神との霊的対話です。神の子供たちが霊的存在として父に祈ることができるということは神の愛のしるしといえますが、私たちはどのように、何を祈るべきかをよく分からない時もあります。しかし聖人たちの模範と聖書の言葉から祈りについて、いくつかのヒントが得られます。

神のたまものである祈り

祈りとは、「神に向かって心を高めること」であり、神の恩恵を求めること」で、祈りというたまものを無償でいただくために必要な心構えである謙遜は、祈りの基礎となります。(カテキズム2559参照)

人間の普遍的召命である祈り

私たちはなぜ祈らなければならないのでしょうか。神をさがし求める人間は罪を犯し、創造主との親しい交わりを失った後も、創造主の似姿はとどめています。すなわち自分に存在を与えてくださった神へのあこがれを失ったわけではありません。

生きておられる方はご自分との交わりを失った人間に手を差し伸べ、お呼びになり、一人ひとりを祈りによる神秘的出会いへと招いておられます。

祈りとは、まず神の愛の呼びかけで始まるもので、祈るという人間の行為は、その愛の呼びかけへの応答になります。神がご自分を啓示し、その姿を明らかにされるにつれて、相互の呼び合い、契約のドラマとなっていくことが祈りと言えます。そのドラマは救いの歴史を通して明らかにあらわれています。(カテキズム2566〜7参照)

祈りの原理

全能の神が行われるすべての偉大なわざ

を心に納め、思いめぐらしていた母マリアから、人間のことばと心で祈ることを学び、(カテキズム2599参照)人の心を見抜く御子イエス・キリストは「**霊**」の思いが何であるかを知っており、「**霊**」は、御心に従って、聖なる者たちのために執り成してください。」という簡単明瞭な原理です。

すなわち、「どう祈るべきかを知らないわたしたちに、「**霊**」自らが、言葉に表せないうめきをもって」私たちの祈りを導いてくださるので、**霊**の働きに心を開き、その導きに自分を委ねることによって、「**霊**」は弱いわたしを助け、(ローマ8・26-28参照)祈りを教えてくださいます。

このように私たちの祈りは「**神の霊の助け**によって、現に見ているものを超えて、見えないものに対して」も、憧れ、望むことであり、私たちは**神の霊に支えられ、様々な希望を祈り、感謝と賛美をささげること**ができるのです。(ローマ8・24-25参照)

そして私たちの祈りが完全なものとなるために何より重要なのは、祈ったことを実践することです。信じない人々は、私たちの言葉を信頼するのではなく、イエス・キリストを信じる人々の優れた生き方をみて、私たちの証言する真理を受け入れるのです。

十月は、私たちの母聖マリアと共にイエス・キリストの生涯と救いの歴史を黙想するロザリオの月です。偉大な魂の言語である祈りを通して神の限りない愛を深く味わい、心を合わせて賛美の祈りを響かせましょう。

「幸いである、絶えず祈る人々！」



東京教区合同堅信式2022

六月五日十四時半より、東京カテドラル聖マリア大聖堂にて東京教区の合同堅信式が行われました。当教会からは2名の方が参加されました。

稲川司教総代理の司式のもと、聖歌隊のシスター方の美しい歌声が響き渡り、厳かな雰囲気の中で堅信式が執り行われました。お式を終えた後のお二人の晴れやかな笑顔が印象的でした。

コロナ禍の中、例年に比べ参列者は少ないようでしたが、無事に堅信式が行われたことに深く感謝しております。

教会委員会



初聖体式 2022

昨年と同様にコロナウィルスの感染予防対策をして六月十九日主日のミサ後の午後一時から初聖体式が行われました。



今年は十一名のお子さまが神学生の方々のお世話でゲームや歌を交えて七回の要理のお勉強のクラスを終えました。クラスの間、元氣一杯だったお子様たちでしたが、前日のゆるしの秘跡、初聖体式当日は緊張した様子だったのが印象的でした。

これからもご聖体を頂くことでイエスさまと一致して力と助けを頂くことが出来ま
すように。

教会委員会



【感想文】

初せい体を受けて

ミカエルH・M

初せい体を受けて、神様に近くなったきがします。ごせいたいをいただくのを楽しみにしていました。

ごせいたいの方は、やさしい味がしました。神様のやさしさをかんじられました。

初聖体を終えて

マリア・アヌンチアータ H・W

私は幼稚園の頃から神様やお祈りが身近なものでしたが、初聖体を受けると一体何が変わるのだろうと正直なところ分かりませんでした。しかし、毎週教会へ行き神様についてたくさんのお話を学ぶ時間はとても楽しく新鮮で、「神様が共にある」ということを少しずつ感じられるようになってきました。

多くの方々に見守られる中で初聖体を受けた時、心から神様に祝福されているよう

でとてもうれしく思いました。

これからは、今まで以上に神様を心の中に感じながらお祈りを大切にして、一つ一つのことに感謝をしながら過ごしたいと思います。



楽しみにしていた初聖体

小さき花のテレジア R・Y

二〇二二年六月十九日生まれてはじめてご聖体をいただきました。はじめてのご聖体は、とてもおいしかったです。小さいころからごミサで、みなさんがご聖体をいただくすがたを見ていて大人にな

ったらわたしもいただけるのかなと、思っていました。が初聖体のごミサにさずかるまでたく山たく山おべん強をしました。

聖書で、イエス様のことについて学んだりごミサで神父様のおせつ教を聞いて自分の行いをふり返ったりしました。初聖体のおべん強の中に、「家族との勉強のススメ」というしゆく題がありました。このしゆく題で家族の人といっしょに神様、イエス様のことを深く学ぶことが出来ました。

これからご聖体をいただく者として神様の力をいただき神様の教えの下でよりよい世界を作るためにはたらく人となっていきたいと、思います。

はつせい体をうけて

ヨハネ N・A

ぼくは、六月十九日の午後のごミサで、はつせい体をうけました。毎週のおべん強会では、神さまのことをいっぱい教わり、新しく知ることが多かったです。お友だちともせい歌を歌ったり、ゲ

ームをしたりして楽しかったです。

前日は、大せいどうでのリハーサルと、はじめてのゆるしのひせきがあり、少しきんちょうしました。

当日は、ぼくたちが神さまに書いた色紙が、さいだんにかざってありました。ごミサの時は、お友だちといっしょに、一番前の列にすわりました。たくさんの方がいらしたので、さいだんに立って、ごせい体をいただく時は、少しはずかしかったです。でも、とてもうれしかったです。

いただいた十字かど花たばを、色紙といっしょに家にかざりました。今の気もちをずっともちつづけます。

はつせいいたい

リオラ L・A

ほんとにおにかみさまがいるみたいにかんじました。きんちょうしたけどがんばりました。うれしかったです。



はつせい体

マリア・クララ Y・N

四月からはつせい体にむけおべん強会にさんかしました。わたしの学校には男の子がいなくて、さいしょはきんちようしていましたが、何回か会うと男の子はとも面白いなーと思いました。男の子とも女の子ともたくさん遊べてなよくなれてうれしかったです。

はつせい体のごミサでは、かわいい洋服を着て、たくさんの人においわいしていただいてもうれしかったです。一番心にとっていることは、ゆるしのひせきとパンをいただいたことです。父と母がいつもパンをいただいているのを見て、どんな味がするのかなーと気になっていました。味はそんなにしなかったです。これからもごミサにあずかってパンをいただくのがすごく楽しみです。はつせい体の一日は本当にしあわせがあふれ出るくらいいい日でした。

はつせいたいのべんきよう

フランシスコ オウガステイン A・I

はつせいたいのべんきようをして、ごせいたいがもらえてうれしかったです。神さまのことにイエス・キリストのことがよくわかってきました。友だちがいっぱいできて友だちとべんきようしたり歌をうたったりしてたのしかったです。

べんきようしてよくおぼえているのが、交わりです。ごせいたいをたべると、神さまとまじわるとべんきようしました。はつせいたいのとききんちようしました。はつせいたいのとき、みんながぼくたちのことを、おいわいしてくれてうれしかったです。はつせいたいのべんきようをしてよかったです。と思いました。やってみたらいいと楽しかったです。



勉強会風景

初聖体の感想

アンナS・Y

はつせい体をうける前にいろいろなベんきょうをしました。

せい書の読み方を教えてもらったり、神様のべんきょうをしたり、せい体のもらい方も教えてもらいました。

たまにみんなで神様などに関する遊びをしたり、楽しかったです。

そして、何週間かたつてついにはつせい体をうけました。

はつせい体をうける前にリハーサルをしたりして、きんちようしましたがちゃんと終わらせました。

家族に祝ってもらったりいろんなプレゼントをもらって、写真もとりました。

今は、教会学校でべんきょうしているのでそっちもがんばっていきたいです。



セント・アンドリュース教会

(シンガポール)

文・写真 柳沢 洋子

シンガポールと聞いて、皆様は何を思い浮かべるでしょうか。

口から水を吐いているマーライオン像？
きれいに整備された都市国家でしょうか？
アジアの中で一番清潔で美しいと言われるシンガポールは、仕事で近隣の国を回った後に立ち寄ると、暑いのが苦手な私はほっとしたものでした。

シンガポールも暑いのですが、治安と町が整備されている安心感がありました。仕事の都合で週末をまたがなくてはならない時には、理由をつけてはシンガポールで一息つきました。

今回ご紹介するのはシンガポールの国定記念物に指定されている、ゴシック・リヴァイヴァル様式のセント・アンドリュース大聖堂です。いわゆるヨーロッパで見慣れた様式の建築で、アジアの気候の中で見る

と少々違和感が無きにも非ずですが、観光のためのルートでも一度は必ずそばを通っていると思います。

この教会は聖公会のもですが、日曜日の朝、ホテルで一番近いローマン・カトリック教会を尋ねると、きれいだし歩いてすぐだからセント・アンドリュースにしたなら、と勧められました。すぐ、と言っても朝から日差しは強く、見えているのに中々着かない、現地の人たちが、ほんの少しの距離でも車に乗る気持ちが良く分かります。

それでも歩いて行ったのは、あまりにも完備された環境で冷房疲れもあり、運動がてらと思ったのと、聖堂にも冷房があるだろうと思ったからでしたが、なんと！ 全ての窓を開け放ち、冷房は無く(当時は田園調布教会にも冷房はありませんでした)人で満杯、聖公会のミサだからと言う理由だけでなく、ミサがとて長く感じられました。

それでも大司教座とあって、正式に着飾った聖歌隊も素晴らしいものでした。ミサが終わって出てくると、その聖歌隊のメンバーが聖堂脇の外で英国式の正装のユニフォームを、大急ぎで脱いでいる所に出くわし、目が合うと、「もうまいっちゃって」と言うゼスチャーをしたので、こちらも「大変だったね！」と手を振りました。今は冷房が付けられたでしょうか。





その後、現地の友人が連れて行ってくれた住宅街の中の小さい教会も祭壇以外に屋根が無い、本当にオープンエアで開放的な教会でした。他民族国家シンガポールの他の宗教施設（ヒンドウ教、仏教、イスラム寺院）もほとんど冷房は無いようでしたが、現地の気候風土には似あっている気もしました。

私はアジアの仕事をするようになってから、飛行機でアジアの国々を上から眺めて、油照りするような緑のジャングルを見て、

この地での戦争のことを考えざるを得ませんでした。戦争の時に、今の私のように「暑いのはキライ」など言えなかった全ての兵士たちの気持ちとその後の結末を思うと、苦しい思いになりました。

このセント・アンドリュース教会のそばにウオーメモリアルパークがあり、日本の占領下で粛清された五万人とも言われる人々のための慰霊碑「日本占領時期死難人民記念碑」があります。

今は、美しい町、美味しい食べ物を楽しむことのできるシンガポールですが、やはり戦争があったこと、それによって傷ついた人たちが大勢いたことを忘れずにいようと思いました。

